

1. はじめに

福山市を中心とする備後地域には多くの古墳があり、文化財の指定を受けているものがあります。今回はその中から備後地域最古の古墳を訪れます。

2. 古墳をさぐる視点

- (一) 所在地
- (二) 立地 一般に前期古墳は丘陵上など高い所に築かれます。
- (三) 墳形 ①前方後円墳 (図1) ・ ②前方後方墳 ・ ③円墳 ・ ④方墳があります。これは、ヤマト王権との政治的な関係の強弱だとする「前方後円墳体制」説が有力です。

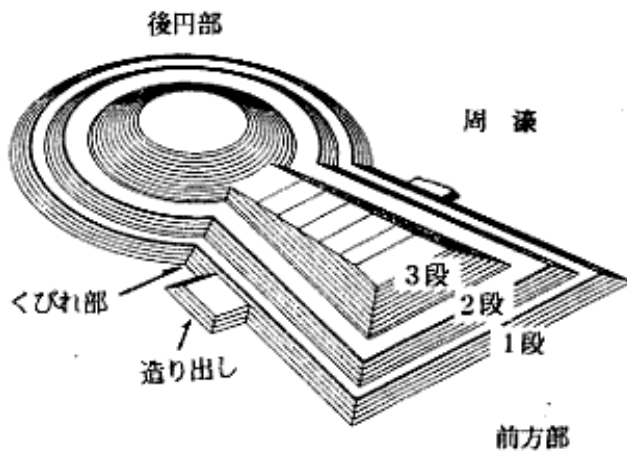


図1：前方後円墳各部の名称

(四) 規模

(五) 外表施設 (葺石)

(六) 外部施設 (埴輪)

(七) 埋葬施設 ① 竪穴系と② 横穴系があります。

竪穴系の埋葬施設には、

石材を積み上げて築いた

竪穴式石室 (図2) のほ

か、木棺を粘土で覆った

もの (粘土槨)、棺をその

まま埋めたもの (直葬) があります。

(八) 副葬品 ① 棺内遺物、② 棺外遺物、そして③ 施設

外遺物に区分されます。

棺内遺物は、鏡や武器といった権威を象徴するものや

装飾品があります。さらに、棺外遺物として、鏡などの

ほかに、土器 (土師器・須恵器) などが出土します。

(九) 築造時期 古墳の年代については、3期に分ける

のが一般的です。前期が3世紀半ば〜4世紀後半、中期

が4世紀末〜5世紀後半、そして後期が5世紀末〜7世

紀はじめとなります。

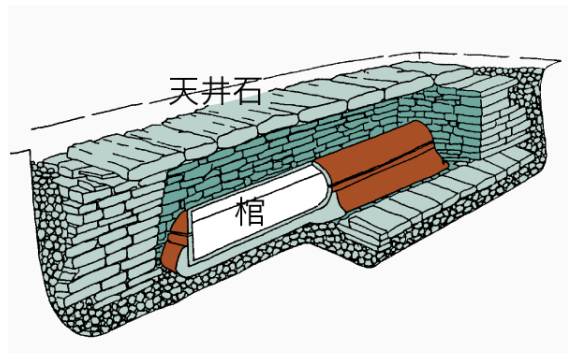


図2：竪穴式石室の模式図

### 3. 潮崎山古墳の概要

福山市内の指定文化財のうち、最も古い古墳が「潮崎山古墳」(写真1)です。出土した三角縁神獣鏡と鉄斧が県の重要文化財(考古資料)に指定されています

- (一) 所在地 福山市新市町大字相方字汐首です。
- (二) 立地 芦田川の右岸、新市の平地を見渡せる低



写真1：潮崎山古墳

丘陵の頂上部(標高約七十m)に築かれています。

#### (三) 墳形

現存する墳丘は、直径約一七m、高さ約二mのきれいな円丘です。

そこから東北に向かって幅約六m、長さ約三十mの細い尾根筋が続いていま

す。そして、この尾根筋の一部が前方部と考えられます。

このことから、前方後円墳と判断します。

(四) 規模 前方後円墳と考えれば、全長約三十m。後円部径は約一七m、高さ約二m。前方部幅は約六mです。

(五) 外表施設 現状で築成の状況は、はっきりしません。また、葺石も周溝も確認されていません。

(六) 外部遺物 今のところ埴輪は確認されていません。

(七) 埋葬施設 竪穴系の埋葬施設であることは確実ですが、詳細は不明です。

なお、この古墳について、江戸時代の地誌『西備名区』は次のように伝えていきます。

「文政十年(一八二七)年の春、潮崎神社を建て替えるための地ならしをしている時、長さ約五尺、横三尺ほどの自然石が現われ、これを裏返してみれば、その下に石灰を詰めた石室があり、その中にある石の上に八、九寸の丸い鏡があった。」(現代語訳は福山市HP)。

このことから、埋葬施設に石材を使用していることは確実ですが、竪穴式石室の天井石だったのか、石棺の蓋(この場合、石棺直葬ですが)だったかはわかりません。

(八) 副葬品 この古墳から出土したとされる鏡が、三

角縁五神四獸鏡（個人蔵…写真2）です。

直径は二二・一cm。先に紹介した神社の建替え中に発見されたものですが、鑄出がきわめて良好な鏡です。



写真2：三角縁五神四獸鏡

背面中央の紐（ちゆう）の部分は、丸い形の円座紐で、その周囲（内区といいますが）に道教由来の神や靈獣の姿が立体的に刻まれています。この刻まれた神や靈獣の総数が「五神四獸」なのです。

外側には外縁があり、その断面形が三角であることから

「三角縁神獸鏡」といいます。

また、この鏡と同時に出土

したと伝わる鉄斧（個人蔵…

写真3）があります。全体に

扁平な板状で、頭部から刃部

に向けて薄くなっています。

長さは二四・八センチです。

（九）築造時期 出土した三角縁神獸鏡が比較的古いものと考えられることから、潮崎山古墳は、備後南部の最古の前方後円墳のひとつと考えられています。

年代は、古墳時代前期。四世紀前半です。

（十）その他 この古墳は、江戸時代に掘り返されていますが、昭和五三年に測量調査が実施されており、その測量図（図3）によって概要を知ることができます。



写真3：鉄斧

#### 4. 終わりにく潮崎山古墳が語るもの

潮崎山古墳の

特色は、一点目「前方後円墳であること」、二点目「三角縁神獣鏡を副葬品とすること」、三点目「芦田川下流域の最古の古墳のひとつであること」です。

古墳はさまざま構成要素をもつ墓ですが、日本列島の広い範囲に同じような特色(定型化)を持ちながら築かれています。

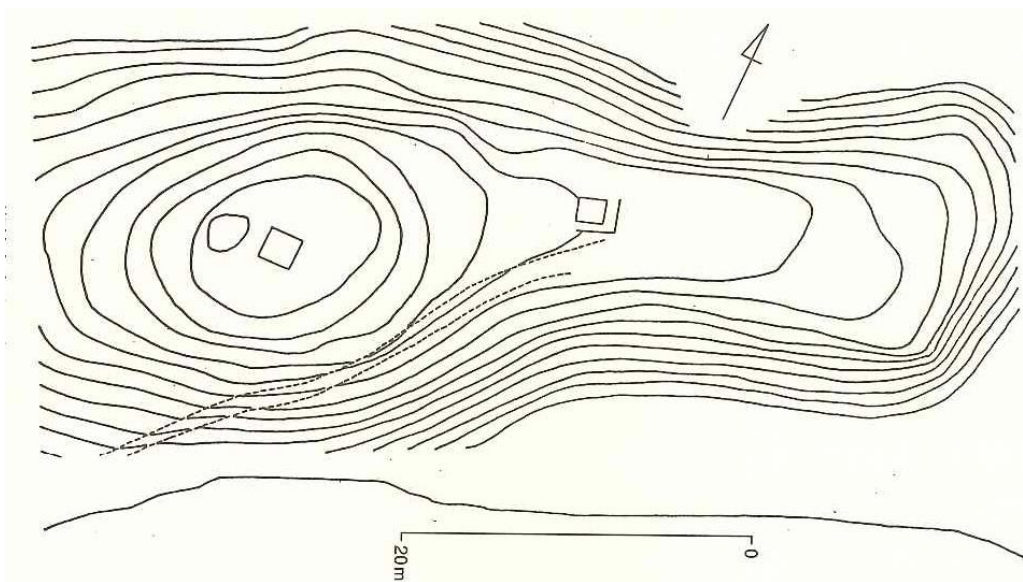


図3：潮崎山古墳 墳丘測量図

そこで、「定型化」(墳形や埋葬施設・副葬品など)に着目して、弥生時代の「王墓」との違いが説明されます。しかし、潮崎山古墳には埴輪が確認されていないなど「定型化」から外れる要素があるように、一律に古墳を定義することは大変難しい作業です。

むしろ近年は、古墳の持つ「階層性」に着目して、墓の形と大きさに身分秩序が示された体制(前方後円墳体制)が主張されています。

潮崎山古墳は、三角縁神獣鏡の出土から、神辺平野でいち早く築かれた古墳であるだけでなく、前方後円墳という墳形を取ることから、「前方後円墳体制」に加わった有力豪族の存在を伝える遺跡と評価できます。

神辺平野に弥生時代の「首長墓」は確認されていません。その中で、いち早く前方後円墳体制(とともに、鏡を媒介とする首長間のネットワーク)に加わった首長がいること。これがこの地域の特色といえます。

(参考文献)

古瀬清秀ほか編『吉備の古墳 下』吉備人出版 2000

脇坂光彦「広島県芦品郡潮崎山古墳について」『古代学

研究 90』古代学研究会 1979